21世紀の歯科医療への道しるべ
「8020運動」の展開

愛知県歯科医師会
専務理事　坂井　剛

1990年代の日本は21世紀の高齢化社会に備えて多くの改革をしなければなりません。消費税の導入や年金の見直し、医療法や老健法の改正等が既に行なわれ、更に医療保険制度の改革や地域保健医療計画の推進等が予定されています。歯科医療の分野も例外ではなく県歯が昨年スタートさせた「8020運動」もその路線に沿ったものです。

これまでの医療を延命の医療とすれば、今後の医療は保健、福祉を含めて生命の充実をめざす包括医療と云えます。県歯が進めようとしている地域歯科保健医療計画は歯科に於る包括医療であり、「8020運動」はその推進の為の道しるべです。幸い、厚生省の"成人歯科保健対策検討委員会の中間報告"でもこの運動の全国的展開が提言されました。

表1は愛知県衛生対策審議会歯科専門部会の資料で、昭和62年の厚生省歯科疾患実態調査結果と「8020運動」の各年代の目標値とを対比させたものです。現状80才で4本の残存歯数と"8020"との間の落差があまりにも大きく、夢の様な話にみえるかもしれませんが21世紀を通してのスローガンと考えれば、いづれ達成可能な目標です。

我々は最近の25年間、母子保健や学校保健に懸命に取り組み、大きな成果を挙げてきました。それに比べて成人歯科保健についてはほとんど何もしませんでした。その間に寿命は80才まで延びて表1の様な結果となりました。健康な高齢化社会の実現に向って、まず我々が意識改革をし、成人歯科保健活動を熱心に推進しなければなりません。

今後の歯科医療は"8020"を意識する事で大きく変化するでしょう。学校歯科保健の目標は六才臼歯の育成と歯肉炎の予防に定まり、成人歯科保健では40才26、50才24、60才23、70才で

21本と中間目標が定まり、歯周疾患の予防を中心として確実に効果を挙げられるでしょう。又、目標を明確にした啓蒙活動を強力に進める事で、国民にも歯を大切にする意識を育て、しいては国の歯科医療政策の見直しにもつなげる事ができるでしょう。

在宅歯科医療はこうした新時代の歯科保健医療、福祉を集約具現化するものとして、我々は熱意をもってこれを推進しなければなりません。近年、目ざましい発展をみせている老年歯科医学、障害者歯科医療は我々現場のスタッフを支援し、歯科大学におけるこの分野の研究を刺激しています。今後は更に組織的な対応を強めていく必要があります。

21世紀の高令化社会を支えるのは今の子供達です。現今の社会は高齢化への対応を急ぐあまり子供達の事を忘れがちです。せめて我々の領域の事だけでも子供達を大切にしてやりたいものです。その意味で次になすべき事は「六才臼歯の育成運動」です。我々は勇気を持って仕事を進めなければならないのではありませんか。

20×20